

北斗句会

北斗句会 自薦三句 (令和元年)

～五十音順～

ふとこころ 石田 木よし
ちちははの墓碑ふところ 山眠る
この堀をめぐる 戦や花
俘虜のごと残る 白菜縛らるる

オンザロック 大崎 石州
八重桜前のめりなる 老い木かな
早く打て蚊が尻立てる 頬つぺかな
温泉上がりのオンザロックや宵の秋

彼岸花 太田 黒幸風
羅の似合ふ 銀座の裏通り
夕闇にかが火いしめくや彼岸花
炎昼に歯をくりいばる地蔵尊

令和 大森 康正
春風や余韻と 帰る美術展
諸人の祝ふ 令和や五月月空
加速して過ぎ去る 日々や晦日蕎麦

猫の恋 川瀬 亮
愛らしく鳴いては成さぬ猫の恋
もう会へぬ人への想ひ 賀状書く
庭を掃く秋の深きを知る 箒

雪鳥 竹内 雲泉
雪鳥やこの日ひと日を生き延びる
子はすので 孫もつ 齢 柏餅
鳴けるだけつくつく 法師なき 尽くせ

ポイントセチア 田中 資凡
存念のポインセチアを 玄関に
乾門抜けて名残りのさくらかな
鯨掴みて少年の白き 脛

北斗句会

好日 好日 夕日 ごと 釣り 上ぐ 鱒の 連珠 かな
 月白 や 炙り 出さる 磯の 波
 好日 や 杖を 放ちて 青き 踏む

傘 寿

速水 紫州

風 薫る 傘 寿 と なりて 旅 枕
 枇杷 の 実を むく や はる けき 家族 の 日
 木 枯ら しと 共に 逝き たる 友 偲ぶ

音色

深見 十万

三味 線の 音色 もくぐもる 薄暑 かな
 冬の 月 遮る もの なり かり けり
 春め く や 茶席 の 菓子 の 淡き 紅り

返り花

藤田 紀潮

身の 丈に 生きて るなり 吾亦 紅
 たま さかに 佳き こと ひとり 返り 花
 逆光 の 礫 と なりて 初雲 雀

地平線

宮下 ひかる

雪 来る か 一枚 着込 む 旅の 人
 川 沿ひ の 梅の 呼び 来る 盛り かな
 菜の花 や 地の 平線 ま で 黄い 一面

竜飛崎

森田 光彦

冬 銀河 白波 寄す る 竜飛 崎
 春 寒や 更地 と 富な りし 喫茶 店
 芝桜 遠く に 富士 の 嶺 白し

史書

吉岡 誠山

秋の 風波 の 調べ を 選び けり
 三が 日 史書 の 紐 解き せて 明日 思ふ
 待ち 人は 姿を 見せず 春の 雪

東京湾

山縣 秀雄

霧 深し 展望 台の 方位 位盤
 夕映 えの 東京 湾や 虫し しぐれ
 のど けし や 古刹 の 廊下 きしむ 音